



羽田ミヤコタナゴ通信

通信

皆さんこんにちは。馬頭高校水産科のタナゴ班です。私たちは昨年度から保全活動に参加し、羽田生息地の現状について少しずつ知ることができました。生息数調査では、朱色を身にまとったミヤコタナゴを見ることができ、感動と喜びで胸がいっぱいになったのを今でも鮮明に覚えています。しかし確認できたミヤコタナゴは一匹。嬉しい気持ちと共に、危機的状況を目の当たりにして、正直ミヤコタナゴが定着するのは難しいのではないかと思います。しかし、ミヤコタナゴ再導入に向けて保存会や専門家の方々と一緒に、泥あげや貝調査など一致団結して作業を行うにつれて、ミヤコタナゴの泳ぐ姿を見てみたい、共に目標を達成したいという気持ちが強くなり、継続して保全活動に携わっていきたいと思うようになりました。

私たちは学校で羽田ミヤコタナゴの飼育をしています。今年も産卵期を迎え、きれいに色づいたオスや産卵管を伸ばしたメスの姿を水槽内で見ることができました。稚魚もたくさん生まれ、今では元気に泳ぎ、餌をたくさん食べ、順調に育っています。今はまだ水槽内でしかミヤコタナゴの姿を見ることはできませんが、馬頭高校で生まれたミヤコタナゴが、羽田生息地に帰り、定着して自分たちで生きていけるようになって欲しいと願っています。そのためにも私たちは、生息地の改善に力を尽くし、ミヤコタナゴや産卵母貝である淡水二枚貝が昔のようにたくさん生息する水路を取り戻したいと思っています。保全活動について未熟な私たちですが、今後ともご指導のほど、よろしくお願いします！

(栃木県立馬頭高等学校 水産科 タナゴ班)



クラスメイト 瀧澤大優さんの作品です

トピック

今回の通信は、皆様方からの話題を中心に紹介させていただきます。

- 1 こちら羽田小5年1組 !! ミヤコタナゴ研究所
- 2 地域の話
- 3 今年度の重点実施事項

発行元：羽田ミヤコタナゴ再導入に向けた協議会
発行事務局：農村環境クリエ



地域の神様

～ ひっそりと地域の方々を見守っています ～

1 こちら羽田小5年1組 !! ミヤコタナゴ研究所

羽田小学校の5年生は、以前より総合的な学習の時間で、身近な環境について調べており、特に羽田小学校の近くには、ミヤコタナゴの生息地保護区やハクチョウが飛来する羽田沼があることから、毎年、ミヤコタナゴやハクチョウについても調べています。調べたことについては、毎年校内の学習発表会で発表を行っています。

ミヤコタナゴについては、平成28年度まで委員会活動で飼育していましたが、児童数の減少によって平成29年度から5年生が飼育担当になりました。平成30年度の5年生は、ミヤコタナゴの飼育活動と総合的な学習の時間で学習したことをとりまとめ、とりまとめた成果を大田原市立図書館主催の『図書館を使った調べる学習コンクール』に出品したところ、市長賞をいただきました。

1年間を通じて取りまとめた資料は大変素晴らしく、ミヤコタナゴの飼育だけでなく、自分たちが疑問に感じた点についての整理・解決手法など、大人顔負けの取りまとめ方には脱帽するばかりです。

今年度発行するミヤコタナゴ通信で、市長賞を受賞しました『こちら羽田小5年1組!!ミヤコタナゴ研究所』の取り組みについて、連載させていただきます。

第1話

☆教えて、ミヤコタナゴ先生!!



○ ミヤコタナゴ先生のプロフィール

コイ目コイ科。全長2~4cm。国の天然記念物。絶滅危惧種ⅠA類に指定（近い将来絶滅する危険性が高い）。マツカサガイに卵を産む。オスは恋の季節になるときれいな色になる。あだ名は『オシャラクブナ』。

○ ミヤコタナゴ先生のおうち

千葉県、埼玉県、栃木県の一部にある。土地改良がされていない川。

○ ミヤコタナゴファミリーを狙う外来魚



・ブラックバスのアニキ

スズキ目サンフィッシュ科。全長30~50cm。北アメリカ出身。現在はほぼ日本全国にいて、もともといた日本の魚（在来魚）を食べてしまう。本名を『オオクチバス』。



・ブルーギルのアネゴ

スズキ目サンフィッシュ科。全長25cm。北アメリカ東部出身。こちらも現在はほぼ日本全国にいて、もともといた日本の魚（在来魚）を食べてしまう。縞模様が特徴。

・他には、鳥に食べられてしまうこともあるんだ。



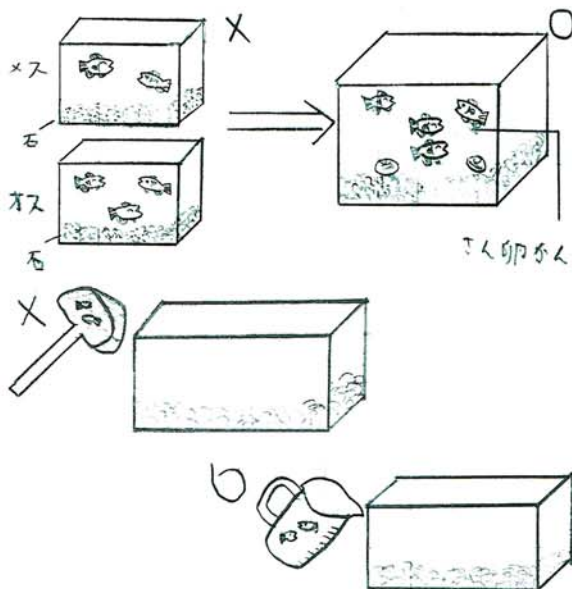
☆ミヤコタナゴの子育て

ミヤコタナゴでは、3つの子育ての注意があります。

①オスとメスを一緒に飼育すること。オスとメスを一緒に飼育しないとミヤコタナゴの赤ちゃんは生まれません。またマツカサガイなどを入れると、貝の中に卵を産みます。

②餌を与えすぎないこと。餌を与えすぎると食べきれずに残してしまい、水槽の水が濁ってしまうから。だからといって餌を少なくするのもいけません。またミヤコタナゴの赤ちゃんには、餌を砕いてあげることが重要。そのままあげると赤ちゃんが、のどを詰まらせる恐れがあるので絶対にしないでください。

③親と一緒に水槽に赤ちゃんがいた時は別の水槽に移し替える。赤ちゃんをすくう時は網ではなく、ピーカーですくいます。



2 地域の話

羽田地域はミヤコタナゴだけでなく、日本の農村文化を代表するような地域です。その地域の話について、地域の皆様と一緒に発信していきます。令和元年初めての通信では3月24日に執り行われました太々神楽について、八龍神社の由来と共に紹介します。

八龍神社

八龍神社は、級長戸辺命・級長津彦命の二柱の神様をお祀りしていて、風雨の神様として信仰されています。特にこちらの神様は『蒙古襲来』の時に嵐を起し敵の舟を撃退したことで有名です。つまり風や雨を司る神様として、五穀豊穡には欠かせない、田畑の悪しき雨風を防ぎ災難を除け、またその反対に恵みの雨や適度の風をもたらして戴き、五穀豊穡を始めとして、家内安全・身体健康・国家や地域の安泰等を祈っております。

創始年代、つまり最初に建てられた年月ははっきり分かりませんが、現在の本殿は寛延二年（1749年）の再建とされています。

大祭は年2回あり、春は太々神楽を全部で13座が奉納され、踊りは大田原市の無形民族文化財に、24面のお面は市の有形文化財に指定されています。10年程前は3月28日に決まっておりましたが、今は勤めの方が多く、その日に近い日曜日に執り行っています。地元の人は昔から「太々」と呼ばれ親しまれていて、日本神話等の流れに沿って物語を順番に演出し、様々な衣装やお面を付けて笛や太鼓に合わせて踊り、時にはひょっとこ等のコミカルな舞もあり、参拝者を楽しませております。又、その年の42歳の厄年の人、昔は人生50年と言われていましたので、42歳の厄年を別名『初老（はつろう、しょうろう）』と言っております。その人たちが悪い厄を払う為に神様にお供えした、お餅や最近はお菓子などを撒くので、それを拾う人々で境内は賑わいます。

この神楽が奉納される様になったのは、江戸時代末期に東北のこの辺の神職が京都まで舞いを習いに行き、文政四年（1821年）から各神社で奉奏され始めました。その頃は神職だけで東北の神社各地の大祭に奉納されていましたが、明治13年に各地城の神社独自で組織が形成され、舞いが受け継がれていく様になりました。その様なことから、最初は何処も同じ踊りや笛太鼓だったのですが、別れて百何十年もたつとまったく違う踊りや音楽になってしまっています。本当に伝承と言うものは難しいものであります。

さて、夏には天祭が行われます。最初は天念仏とか天道念仏と言われていましたが、大正11年に天祭と改められました。10年程前は7月27日と28日の2日間に決まっていますが、勤めの方が多くなり、今はその日に近い土日に斎行される様になりました。初日の朝5時より櫓を組み立て始めますが、中心となる太い4本柱に16柱を組み添えて天棚を2段設け、一昼夜にわたり笛太鼓を奏で、全部で14座の楽を奉納致します。櫓の高さは10メートル位あり、1段目で楽を奏で、2段目は交代要員の控え場所となっております。初日の夕方には棚祭奉告祭を行い、2日目の10時には夏の大祭神事を行います。昔は三昼夜行われたと聞いております。

こちらは本格的な夏に備え、田畑や人々の生活が台風や雷雨等の災害を受けない様に、また日照りや夏枯れにならないように、適度な風雨に恵まれますようにと祈る神事です。こちらもいつ頃から始まったか分かりませんが、やはり羽田の集落の長男や跡取りが執り行っています。今は保存会のメンバーが受け継いでおりますが、後継者不足で苦労しています。

(八龍神社 宮司 星野 芳典)

平成31年3月24日に開催された太々神楽の様子です。



3 今年度の重点実施事項

ミヤコタナゴ通信第9号でも紹介しましたが、今羽田のミヤコタナゴ再導入にとって一番の課題となっているのが、マツカサガイが安定して再生産できる（繁殖し続ける）環境が消滅しているということです。昨年度から営農中心の水管理で水路を管理してきましたが、今年の2月には水量が少なくなり、水路が凍結してしまうことも起こりました。凍結の影響を確認するため、今年の春先に水路を目視で確認しましたが、昨年度大量に繁殖が確認されたドブガイは生存していました。そのほかの生物への影響については今後の詳細な調査によって明らかになると思います。

そのようなことから、今年度、ミヤコタナゴの本格的な再導入を視野にいて、より具体的な水管理計画や環境整備等について検討・作業を進めていきます。

平成6年の頃の生息水路の環境と、今の生息水路の環境とでは、周辺を含めた営農形態の変化、生活活動の変化、気象状況の変化などがあり異なっていると思われます。その為、ミヤコタナゴの再導入を行うにおいては、それなりの努力を伴うことは必須条件になっており、今までと同じような手法では、ミヤコタナゴを復活させることは無理であるとも考えられます。その為今年度はもう一度、生息水路の環境について、マツカサガイが安定的に生息できる環境を整備するため、以下の取り組みを実施します。

○ 羽田沼の干し上げ

計画性をもって沼の干し上げ作業を実施することとなり、自治会や水利組合、風致保存会の協力のもと、昨年度は8月下旬から9月下旬までの1か月間、沼の干し上げ作業を実施しました。今年度は、底質改善をより効果的にするために、沼の干し上げ期間を長くし、8月中旬から10月上旬までとしております。また沼の干し上げの時にのみ、羽田沼上流域の湧水量が観測できるため、その期間に羽田沼の湧水量を観測します。



○ 生息水路の泥上げ

今までも生息水路の泥上げ作業を定期的に行っていましたが、作業人数の関係で泥上げ範囲が限定的になっていました。また水路より上げられた泥は、畦畔にそのままおいていた為、降雨で再び水路内へ流れ込む状態でした。その為昨年度から馬頭高校水産科の生徒の協力を得て泥上げ作業を実施し、すくい上げた泥についても麻の土嚢袋へ入れ、水路の崩落部や畦畔の補修に用いました。今年度から馬頭高校水産科の全面協力を得て、計画的に水路の泥上げや、すくい上げた泥で水路補修作業を実施します。実施時期は羽田沼の干し上げ時期に合わせて実施する計画です。



○ 生息水路全域における二枚貝調査

生息水路全域での二枚貝調査については、20年ほど前に大学の研究で行われ、その当時の二枚貝の生息分布を知ることができますが、その後全域での二枚貝調査については実施されておらず、現状で、どこにどの程度の二枚貝が生息しているのかは不明です。近年生息水路内で増えているドブガイについても、どの範囲で増殖しているか明確になっておりません。その為、今年度馬頭高校水産科の協力を得て生息水路750m全域での二枚貝の生息状況調査を実施します。調査を行うことにより、生息水路の環境も明らかになり、改善すべき点も見えてくるかもしれません。



○ 羽田小学校による水質調査

農作業に合わせた水の管理や、冬場の水鳥飛来による影響が、羽田沼や生息水路の水質にどのように影響しているのかを定期的に観測し、年間を通して羽田沼や生息水路の水質が、どのように変化するかを把握するために、羽田小学校が中心となって水質調査を実施することになりました。今までも環境省で定期的に行ってきた水質調査ですが、昨年素晴らしい取りまとめをされた羽田小学校の児童の皆さんの力をお借りして、羽田沼の水質について、年間を通してモニタリングしていきます。身近で生活し、地域を観察している児童の皆さんから、何か素晴らしいアイデアが出てくる気がします。



問い合わせ先：大田原市教育委員会事務局文化振興課文化財係
TEL 0287-23-3135
FAX 0287-23-3138
E-mail bunka@city.ohtawara.tochigi.jp